



住吉教会 2016年度テーマ

「いつくしみ深く 御父のように」
—いつくしみの特別聖年—

復活を宣べ伝える

傘木澄男神父

ある人が雑誌の記事にこう書いていました。「キリスト教は立派な宗教だと思うが、ひとつ残念なことがある。それは復活ということを言い出したことだ。これさえなければ良い宗教だったのに。」これには驚きました。復活信仰がなければ何のためのキリスト教か、という程大事なことなのに、こういうことがいかにも良識の様に平然と言われると、この国ではやはりキリスト教は全く理解されていないのだ、それこそ残念なことだ、と思います。クリスマスだけがキリスト教だと思っている人が多く、復活は全く不条理で余計なことと受け取られているのでしょう。クリスマスは神の御子の受肉の秘義で素晴らしい信仰ですが、それはまだ入り口です。神の御子は受難と復活によって救いを成し遂げるためにこそ人と成られたのです。復活が目標であり完成です。それなのに、キリスト教の入り口まで来て後は無関心、これが大方のキリスト教に対する態度なのでしょう。

復活は不条理だと言うのですが、ではクリスマスは不条理ではないのでしょうか。復活を不条理と言うのは、人の亡骸が生き返ることだと思っているからでしょうが、復活とは肉体が生き返ることではありません。人間が霊肉一体として死を超えて霊的な世界に入り永遠のいのちが保証されることです。これは神の啓示によることで、キリストがその教えとわざと、何よりもご自分の復活によって証しして下さったことです。そのキリストを信じるなら、その時復活は自然に受け入れられるものとなります。いきなり「復活を信じますか」と問えば、誰でも「それは不条理だ」と答えるでしょう。そこで「神を信じますか」と問うのです。「信じません」と答えれば、それ以上復活を語るのは無駄です。「信じます」と答えれば、もう復活を信じたも同然です。神は死を超える永遠のいのちを持つお方です。その神が存在して私たちが生かして下さると信じるなら、神は私たちに永遠にそうして下さいと信じる、つまり復活を信じる、のは当然なことでしょう。

聖パウロは「キリストが復活しなかったのなら、わたしたちの宣教は無駄であるしあなたがたの信仰も無駄です」(Iコリント15:14)と書いています。私たちに託された使命は福音宣教です。福音とは復活です。福音宣教とは復活を告げ知らせることです。復活を強く信じて力強くこれを宣べ伝えること、これが私たちの使命です。この時期、しっかりと噛みしめたいことです。(以上)